

短期大学における情報教育の現状と課題

大和田 栄・糸山 昌己・山下 琢巳
東京成徳短期大学 言語文化コミュニケーション科
{ohwada, itoyama, yamashita}@tsc.ac.jp

0. はじめに

本稿では、短期大学における学生の「情報」に関する知識・能力、及び情報教育についての現状を報告し、今後のカリキュラム・授業内容改善資料とし、短大での情報教育のあり方について考察する。

1. 短期大学概況（3学科構成）

言語文化コミュニケーション科（女子 85 名定員）：観光・英語・日本文化の3コース編成。さらに観光・海外留学・英語コミュニケーション・児童英語教育・文学と創作・書道・日本語教育の7履修モデルを設定。モデル毎に専門科目が設置されるが、科目履修の自由度は高い。2003年度までは、日本語文化・英語文化の2専攻あり。

幼児教育科（共学 150 名定員）：幼稚園教諭・保育士養成のための科。児童心理学、保育原理、児童福祉等の幼児教育系科目を必修として多く設置。

ビジネス心理科（共学 100 名定員）：消費者の心のしくみの理解をビジネス活動にいかす心理関係科目、消費者のニーズを把握し販売・宣伝方法を考えるマーケティング関係科目、報告書や企画書の作成といった実務能力を高める科目を設置。ノートパソコン携帯を全学生に義務づけ。

Cf. 同じキャンパスに2004年度より四年制の子ども学部設置。千葉県八千代市には人文学部。

2. 学内パソコン機器環境

学生用 PC56 台（Win98SE）授業用
学生用 PC56 台（Win XP）授業用
学生用 PC32 台（Win95x26, 98x6）学生自由利用
他に教員用 PC+AV 機器を配備した教室が5教室（有線 or 無線 LAN の配備あり）

3. 情報教育系科目（PC 利用科目）

A. 科目数（2003 年度）

		情報論		リテラシ		ツール		CALL	
		必	選	必	選	必	選	必	選
言コミ	日	1	0	1	5	0	2	0	0
	英	1	0	2	5	0	1	2	5
幼児教育		0	0	1	0	1	0	0	0
ビジネス心理		0	2	2	2	0	0	0	3

B. 情報系・PC 利用科目の割合

		情報科目		総科目		割合
		必	選	必	選	
言コミ	日	2	7	7	135	6.3%
	英	5	11	6	141	10.9%
幼児教育		2	0	8	154	1.2%
ビジネス心理		2	7	11	52	14.5%

C. 科目名（*必修：資格必修含む）

科	情報論 / リテラシ / ツール / CALL
日 文	情報論* / 情報演習*・情報基礎演習 A・B・メディア技術演習・英文ワープロ演習 / 文書表現トレーニング・データベース演習 / -
英 文	情報論* / 情報演習*・情報英語*・情報基礎演習 A・B・メディア技術演習・英文ワープロ演習 / ライティング / 英語 B *・英語コミ IC*・英語コミ C・TOEIC ・ 通訳演習・映画翻訳演習
幼 教	- / 情報機器の操作* / 生活環境論* / -
ピ 心	デジタルコンテンツと情報倫理・計算機システム演習 / コンピュータリテラシ演習*・ビジネス基礎演習*・コンピュータネットワーク演習・統計処理演習 / 基礎ビジネス英語・インターネット英語・コンピュータ英語

4. 現状

4-1. アンケート結果 1 (全学) <2003 年度入学生>

短大入学前の段階でのパソコン使用経験と卒業段階での習熟度を自己申告という形でのアンケートを行い、本学全体としての状況及び科ごとの差などについて考察した。(回答数: 日文 19・英文 37・幼教 187・ビ心 36・総数 279)

A. 入学前パソコン経験 (%)

	日文	英文	幼教	ビ心	全体
かなりの経験あり	10.5	5.4	6.4	27.8	9.3
多少の経験あり	73.7	62.2	63.1	38.9	60.6
ほとんど経験なし	15.8	18.9	21.4	30.6	21.9
全く経験はない	0.0	13.5	8.6	2.8	7.9

全体では、「かなりの経験」が1割を切るが、「多少の経験」と合わせて7割という数字になる。科ごとでは、ノートパソコン必携としているビジネス心理科において「かなりの経験」が3割近い。

なお、大半が高校で、4割近くが中学でパソコンを学習しているが、基本的操作に習熟しているのは6割程度である。

アプリケーションソフトの利用では、ワープロソフトの利用経験が圧倒的に多く7割5分程度、表計算ソフトが4割程度。ワープロ経験が多いためか、タイピングについては、ある程度の速さ以上で打てると回答したものが半数を超える。ただし、ブライントタッチとなると1割に満たない。

インターネット・ホームページの閲覧については、8割程度が検索エンジンなどを利用して目的のページを探し出しているが、ソフト・情報などのダウンロードとなると1割程度の数値となる。

電子メールの利用となると、「したことがない」が4割を超え、「したことがある程度」よりも多い数値になり、「よく利用する」は1割に満たない。

B. 短大での成果

短期大学在学中にパソコンに関する技能がどの程度身に付いたかの問に対して、「身についた」という回答は7割5分を超えるが、「かなり身についた」と

なると8%不足となる。科ごとでは、パソコンリテラシ・スキルの授業の少ない幼児教育科における「かなり」は5%を切るが、他の3科では15%前後の数値となる。「かなり」と「少し」を合わせると、パソコンスキルについての授業の多いビジネス心理科で「身についた」が86%となるが、「身につかなかった」とする回答も1割を超えている。

	日文	英文	幼教	ビ心	全体
かなり身についた	15.8	13.5	4.8	13.9	7.9
少しは身についた	57.9	62.2	70.1	72.2	68.5
あまり身につかず	15.8	13.5	19.3	11.1	17.2
身につかず	0.0	10.8	3.2	0.0	3.6

技能別(ワープロ、表計算など)に見ると、やはり「少しは身についた」という回答が多数で、「かなり」という回答は、タイピングが16.8%、ワープロが13.6%であった。科別に「かなり身についた」技能を数値の高い順にみると以下のようになり、それなりに科の特性が出ている。

技能	かなり身についた率	科
タイピング	35.1%	英文
プレゼンテーション	30.6%	ビジネス
タイピング	25.0%	ビジネス
ワープロ	22.2%	ビジネス
プレゼンテーション	21.1%	日文

C. 情報倫理

ネットワークに関わる犯罪については、全体では7割を超えるものが一応の知識をもっているようだが、「よく知らない」も2割を超している。また、ネットワーク利用におけるマナーについても、「相手を意識し、失礼や傷つけることがないよう常に心掛けている」は3割程度で、「特に意識したことはない」が2割を超している。

パソコンウィルス関連で、知らない人から届いた添付ファイルを開かないようにしているものは、英文とビジネスで7割を超えるが、幼児教育科では54%、日文では42%程度と決して高い数値ではない。また、ウィルス対策をしている割合は全体では4割

だが、高頻度でパターンファイルを更新しているのはその半以下以下の 17.9%である。科別ではノートパソコンを必携させているビジネス心理科では、77.8%が対策を施し、36.1%がパターンファイルの更新もきちんとしているという回答である。しかし、ウィルス感染については、他科が 15%前後の感染経験であるところ、対策を施しているビジネス心理科では 30%を超えていた。

また、ネットワーク資産に限ったことではないが、著作権についての問では、「注意をしている」も 4割を超えているが、「著作権」という言葉を知っているだけで、内容はよく分からないというものも 4割近くあり、「まったくわからない」と合わせると半数近くが著作権についての意識が低いと言える。

4-2. アンケート結果 2 (言コミ)

< 2004・2005 年度入学 >

筆者たちが所属する言語文化コミュニケーション科については、別途、入学段階でのアンケートを行い、現状の把握を行っている。(回答数：2004 年度 87・2005 年度 81)

A. 高校でのパソコン授業 (%)

	2004 年度	2005 年度
ほとんどなし	49.4	24.1
少し	37.9	50.6
よくあり	12.6	24.1

B. 自宅でのパソコン利用 (%)

	2004 年度	2005 年度
なし	52.9	45.6
週 1 回程度	29.9	27.8
週 3 回以上	17.2	24.1

「なし」は自宅に PC が無い場合も含むが、2005 年度の数値では、45.6%のうち 26.6%が自宅にあっても利用せず。

C. タイピング (%)

	2004 年度	2005 年度
できない	28.7	24.1
ゆっくり	56.3	49.4
まあまあ速く	12.6	24.1
ブラインドタッチ	1.1	1.3

D. PC 電子メール利用 (%)

	2004 年度	2005 年度
アカウントなし	81.6	63.3
時々使う	12.6	31.6
よく使う	5.7	5.1

E. Web サイト利用 (%)

	2004 年度	2005 年度
ほとんどなし	26.4	20.3
時々使う	52.9	50.6
かなり使う	20.7	29.1

2004 年度と 2005 年度の入学者の比較からは、それ程大きな差ではないが、全体的にパソコン・インターネットの利用の度合い・スキルが高くなっていることが伺える。例えば、高校(一部には中学も含む)でのパソコンを利用した授業の「ほとんどなし」は半減し、電子メールの利用も、「時々使う」「かなり使う」を合わせると倍増している(それでも 4割に満たない)。

< 2005 年度・言コミ情報系科目 >

情報(必修)・情報メディアリテラシ - ・メディア技術演習 A/B・情報処理演習 A/B・プレゼンテーションの技法・パソコン基礎演習

5. 考察

全学を対象としたアンケート調査結果から、他科よりビジネス心理科が、入学前においても、2年間を経過した段階においても、数値的に PC に関するスキルが高いことがわかる。このことは、ビジネス心理科がパソコンを全学生に必携させ、PC を利用する科目の割合が高く、上述した科目以外でも部分的に PC を利用する科目があることから自然な帰結であると言える。ただし、PC 必携のことを考えれば、もっと大幅な習熟成果が期待されて良いとも考えられる。

幼児教育科は、保育士・幼稚園教諭養成という性格上、カリキュラム上それ程多くの情報系科目を設置することが難しく、カリキュラムから情報関連ス

キルが大幅に高まることも期待しにくいと言える。また、パソコン教室での授業を希望する教員もいるが、現在のパソコン教室環境では厳しい。環境整備との兼ね合いもあるが、「ツール」としてのPC利用をもう少し増やし、また、幼児教育科に現在ない情報倫理系の内容が、何らかの形で学生に提供できることが必要だと思われる。

一方、筆者たちが所属する言語文化コミュニケーション科では、全学アンケートの年度を最後に日本語文化専攻・英語文化専攻の専攻を廃止し、情報系科目の大幅な見直しを行い、科目数も増大した。(詳細は大和田(2005)参照。但し、その後の2005年度より情報科目一部減少。)従って、上述の2003年度入学学生の状況よりも、2004年度以降の学生はスキルの面的にも知識的にも高まっていることが期待される。但し、4.2での言コミの調査からはっきりしている通り、入学時でのパソコン・ネットワーク利用状況は高まっているため、アンケート自体の方法についても考慮しつつ、継続的な調査を行いたい。

6. 今後の課題

「情報教育」と言うとき、時代によっても、また対象とする学習者によっても、その内容は異なり、「情報=コンピュータ」という偏った見方はもちろん教員を含めて改められなければならない、コンピュータやインターネットという仕組み以外を利用する従前のメディアの特徴についても合わせて考えていく必要がある。書籍・テレビなど、多種多様なメディア間でのバランス感覚をきちんと身につけてもらうことも、重要な課題であるといっている。さらに、情報が巷にあふれ、情報の取捨選択能力、実践的情報活用能力の育成が急務であることは言うまでもない。

従って、現況を踏まえると、パソコン・ネットワークの基本的スキル(マウス操作・タイピング含む)や、ワープロ、プレゼンテーション支援ソフト、表計算などのアプリケーションソフトの基本的使用方法については、今しばらく必要であるが、スキルだけの授業だけでは、なかなか、学生に動機付けを提供することは難しいのではないだろうか。

そういった点を打破するためには、「情報系」の科目の範囲ではなく、他の科目と出来る限り有機的に結びつけた形で、学生にコンピュータやネットワーク、或いは他のメディアを積極的に使う動機付けを提供することが極めて重要だと考えられる。使い道のない「スキル」や「知識」ではなく、コンピュータなどの機器をあくまでも「道具」として使っていくことにより、自然と身に付くことは多いと思われる。もちろん、教員間のデジタルデバイドを減らすための策も講じる必要があるだろう。

また、全般的には入学段階のコンピュータリテラシはそれ程高いとは言えないが、少なくとも、年々着実に高まっている傾向にあることは確かである。高校での教科「情報」の必修化前の学生であるため、次年度以降はより一層この傾向は高まる可能性があるだろう。カリキュラムの変更、あるいは、授業内容の変更の検討も必要になってくるであろう。懸念されることのひとつは、現在でも存在するが、高校での「情報」により、一層学生間のデジタルデバイドが進むのではないかと、ということである。必修になれば、全員が同じスキルや知識を身につけてくれる、とはとても思えない。そういったことへの配慮も必要であると考えられる。

なお、環境自体が異なるので、単純な比較はできないが、必要に応じて、他の短大・大学の状況なども参考にすることも視野に入れて、今後も調査・考察を継続したい。

参考文献

大和田 栄. 2005. 「本学・言語文化コミュニケーション科における情報教育の現状と課題」『東京成徳短期大学紀要 第38号』pp.27-36.